

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第215号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2024年3月21日

ベニヒワ



2024.1.21 札幌市南区 真駒内公園

撮影者 市橋 栄二（札幌市中央区）



も く じ

センダイムシクイの繁殖生活とツツドリの托卵	札幌市中央区 川路 則友	2
【私の探鳥地】北海道最南端 白神岬		
津軽海峡を越える鳥たち 北海道大学水産学部3年	川森 日向	4
図鑑の役割 改訂版『さっぽろ野鳥観察手帖』の制作を通して		
	札幌市南区 河井 大輔	6
石狩浜におけるヨーロッパムナグロ秋季の観察記録		
	岩見沢市 先崎 愛子	8
【野鳥情報コーナー】札幌でニシオジロビタキの観察	札幌市手稲区 満保 彩女	9
コノドジロムシクイ 道央初記録について	埼玉県川越市 堀 琴音	9
キガシラシトド 根室での記録	北海道大学生命科学院1年 内田 耕平	10
会員一筆 人生2度目のアレ モリムシクイとの出会い	札幌市豊平区 佐伯 武美	10
【私の鳥見スタイル】木版画とシマエナガの思い出	江別市 木版画家 酒井 睦子	11
探鳥会ほうこく		12
鳥民だより/表紙の鳥		15
探鳥会あんない		16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

センダイムシクイの繁殖生活とツツドリの托卵

札幌市中央区 川路 則友

＜センダイムシクイ？ツツドリ？＞

センダイムシクイといえは、札幌市内だと5～7月ころに身近なちょっとした森林に行くと、高い樹の枝の間をちょこちょこ飛び回りながら、時折り「焼酎一杯ぐいっ」とか、「鶴千代君～」と鳴いている鳥が思い浮かびます。すばしこいので姿をじっくり見るのは容易ではありませんが、その特徴的な声は、探鳥会でもすぐにわかる種類の一つですね。でも、そのセンダイムシクイはどんなところに巣を造り、何個くらいの卵を産み、巣立つまでどのくらいかかるかなどを知っている人は少ないでしょう。そういうときは図鑑の出番です。ある図鑑には、巣は地上の窪みに造るとあります。あんなに高いところばかり飛んでいるのに、意外ですね。また別の図鑑には、1回の繁殖に産む卵の数（一腹卵数）は4～6個で、まれに7個、と書いてあります。しかし、これらは実際にどの程度正確なのでしょううか？



写真1. センダイムシクイ（個体識別のために、脚にカラーリングを装着）2021.5.24 黒田治男さん撮影

また、ツツドリという鳥はカッコウの仲間で、自分では巣を造らず、ほかの鳥の巣に卵を産み込み、育ててもらう托卵という戦略をとります。センダイムシクイとの間にはなぜか切っても切れない縁があるようで、托卵する相手（宿主）としてよく選ばれています。本州以南では、センダイムシクイの巣に産み込むツツドリの卵は白っぽい色をしているようですが、北海道のセンダイムシクイの巣には、赤褐色の卵を産み込みます。これは本誌172号に森さやかさんが、「赤い卵を産む北海道のツツドリ」で詳しく書いています。そこで、実際に北海道でセンダイムシクイとツツドリがどんな繁殖生活をしているか調べました。

＜17年間 繁殖生活を調べる＞

調査地は、札幌市豊平区羊ヶ丘にある森林総合研究所北海道支所実験林内の落葉広葉樹林（標高150～200m）です。巣は地上の窪みに造るとは言っても、やみくもに地面を探しても見つかるはずがありません。そういうときは当のセンダイムシクイに案内してもらいます。繁殖期特有の微妙な行動を見極め、彼らと駆け引きをしながら巣の位置を特定していきます。しかし、散々だまされて、あさっての方向ばかり探してしまい、とうとう諦めたという経験はざらです。艱難辛苦の末、二人の共同研究者とともに、17年間でなんとか100個以上の巣を見つけました。巣を見つけるとそれで終わりではなく、そこから定期的にチェックして、その進行を確認しなければなりません。我々のせいで捕食者に気付かれるようなことになったら元も子もありません。それこそ細心の注意を払いました。こうして調べた結果、興味深いことが次々わかってきました。たとえば、調査地での一腹卵数は2個から8個と幅がありました

が、7個の巣が6割以上を占め、6個の巣と合わせると実に85%以上になりました。図鑑に書かれていた割合とかなり異なります。また巣の中でヒナを育てる期間（巣内育雛期間）も図鑑よりかなり短いことがわかりました。

センダイムシクイは雌雄同色ですので、さえずっている現場でも見ない限り、雌雄の区別さえつきません。ましてや、複数の個体と一緒に現れると、どれがどれやらわからなくなってしまうのです。そこで、環境省から学術研究用の捕獲許可を得て、5年間で合計61羽の成鳥にカラーの足環を付けました（写真1）。すると、そのうち少なくとも17羽（27.8%）は翌年以降も、調査地にふたたび戻ってきていることが確認されました。また、オスはほとんど同じ場所に、メスはかなり離れた場所に戻ってくる個体が多いこともわかりました。さらに、同じ個体が造った巣を複数年にわたって見つけることもできました。渡りをする小鳥が同じ場所に戻ってくる原因として、前の年に繁殖を成功させると、それが良い体験となり、翌年もその場所に固執する傾向が強くなるという説があります。このセンダイムシクイでは、毎年続けて繁殖を成功させた例もありましたが、3年続けて同じ場所に戻ってきたのに毎回失敗し、4年目にやっと成功した例も見られました。したがって、センダイムシクイで同じ場所に戻ってくるのは、必ずしも前年の繁殖成功経験が効いているわけではなさそうです。

<センダイムシクイとツツドリの仮親子関係>

センダイムシクイは、巣の近くでツツドリの姿を見るとすぐに鋭い警戒の声を発し、ときには自分より体の大きなツツドリに突進し、追い払う行動も見せます。おそらく托卵される相手として警戒するように、長い期間刷り込まれているのかも知れません。しかし、いったん巣の中に卵を産み込まれてしまうと、何の疑問も持たずに、自分の卵と一緒に温めます。ふ化したばかりのツツドリのヒナはしばらくすると自分の背中に宿主の卵もしくはヒナを乗せ、巢外に放出してしまいます。その間、巣の中にいる親鳥はじーっとその様子を見ているだけで、何の行動も起こしません。実に不思議な光景です（写真2）。



写真2. 仮親・センダイムシクイの顔の下にツツドリのヒナの一部が見える。背中に卵を乗せて、外に押し出している。2014.6.5（動画撮影より）

また地面に捨てられた白い卵がいくつも無造作に転がっているのは、非常に目立ちますが、その状態が数日間も続きます。しかし、それが捕食者を誘引して、卵だけでなく巣もやられてしまうという状況はこれまで見られていません。メスは巣の中で、我が子より巣立ちにかなり時間のかかるツツドリのヒナの世話に余念がありませんし、オスも全く気にせずに巨大に成長していく他人の子にせっせと餌を運んで来ます（写真3）。ツツドリのヒナが巣立ちに失敗した原因には、ヘビやタヌキによる捕食のほかに、かなり遅れてふ化はしたものの、巣の中ですでに大きく育った義兄弟(?)たちに押しつぶされて死んだ例や、宿主のヒナがすべて巣立ったあとに、ツツドリの卵だけふ化しないまま残されていた例などがありました。なかなかツツドリの世界も厳しいものと感じます。



写真3. 巨大なツツドリのヒナ(右)に給餌するセンダイムシクイ(左) 2015.6.26（動画撮影より）

<なぜセンダイムシクイとツツドリを調べた？>

ツツドリは托卵という習性をもつので、宿主がいないと、もはや種を維持することができません。逆にツツドリがじゅうぶん生息している環境は、とりもなおさず、宿主となる鳥たちがかかなり安定した状況にあるということを証明することにもなります。すなわち、ツツドリの存在は健全な森林生態系を示す指標の一つになるのかもしれませんが。そういう観点で森林の鳥たちを見ていくと、なかなか楽しいのではないかと、思います。センダイムシクイやツツドリは、いまはそれほど数が減っているということではなく、緊急の保全策というものを考える段階ではありません。しかし、いつなんどきどんな種に危機が訪れるか想像つきません。そうなる前に、それぞれの鳥の生態について少しでも多くの詳細な情報を蓄積しておくことはとても重要と考えます。

参考文献

もっと知りたい方は「生態図鑑 センダイムシクイ」(バードリサーチ)と「鳥学会論文」をご覧ください。

<https://db3.bird-research.jp/news/202311-no3/>

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjo/72/2/72_181/_article/-char/ja

私の探鳥地 北海道最南端 白神岬

津軽海峡を越える鳥たち

北海道大学水産学部3年 川 森 日 向

こんにちは。北海道大学水産学部3年次に在学中の川森日向と申します。本学水産学部では1、2年次に札幌キャンパスで学び、3年次から函館キャンパスに移行します。私も2023年度から函館へと移り、道南をメインフィールドとして鳥見を続けています。本稿では、秋の渡りを中心として、北海道最南端に位置する白神岬での鳥見をご紹介します。

<北海道最南端に位置する白神岬>

白神岬は渡島管内松前町と福島町にまたがる北海道最南端部分を指します。対岸には青森県竜飛崎が見え、空気が澄んでいる日には岩木山や白神山地まで見えることもあります。岬の西側海上には海鳥の繁殖地である松前小島と渡島大島が見られます(写真1)。海面から切り立った崖にはススキをはじめとする草本植物が生え、上部にはいくつかの山が点在しています。白神岬の山に生えている木は多くがアカマツなどのマツ類で、北海道というより本州らしい植生をしています。

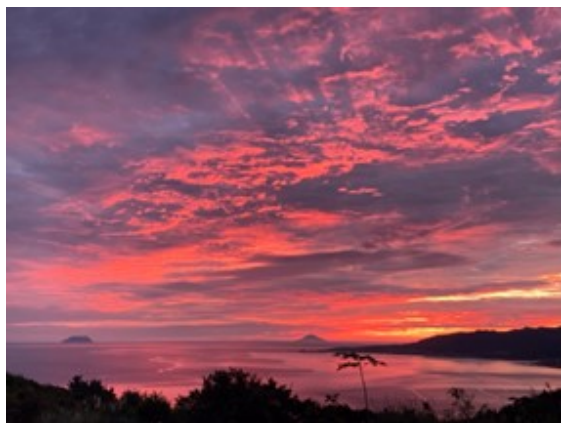


写真1. 白神岬から松前小島(左)・渡島大島(右)を望む

こうした立地から、白神岬では北海道から本州を目指し海へ飛び出す渡り鳥、そして津軽海峡を越えて北海道へやってくる渡り鳥の両方を観察することができます。特にヒヨドリの渡りは有名で、ご存じの方も多いのではないのでしょうか。

<タカの渡り>

白神岬での渡り観察として外せないのがタカの渡りです。秋の渡りは、9月初めからのハチクマ(写真2)の渡りに始まり、私が主役と感じたノスリ、そしてハイタカ類の渡りが11月ごろまで続きます(写真3、4)。

白神岬での渡り観察の魅力はとにかくタカとの距離が近いこと、そして風に乗って津軽海峡を越えていくさまが見られることだと思います。遠く福島町側の山からタカが上昇し、羽ばたきながらまっすぐこちらへ飛んできたあと、

すぐ頭上を通過して津軽海峡へ飛び出したり、あるいは複数羽でタカ柱を作って高度を上げ、南へ流れていったりと、一個体一個体じっくりと観察でき、数以上に満足感の高い観察ができます。数は少ないながら、チゴハヤブサやチュウヒ、ハイイロチュウヒなどの渡りも観察されています。この秋にはサシバ、アカハラダカ、ケアシノスリあたりを見つけてみたいものです。オオワシやオジロワシといった海ワシ類の渡りも観察できるだろうと考えていますが、昨シーズンは叶いませんでした。道南は北海道の他地域と比べて海ワシが少ないのですが、今年はぜひとも津軽海峡を越えて渡っていく海ワシを観察したいところです。

ただ、こうした観察はいつでもできるわけではなく、ある程度の条件があることが掴めてきました。一番の悪条件は強い西風で、風速6m/s以上の西風の日ほとんどタカが渡りません。ただ東風の場合はある程度の強風でもタカは飛ぶようです。東風の強い日は白神岬から西側の日本海海上に向かって南下するタカが多く、対岸である竜飛崎のカウント結果と一致しないことが多いのも面白いところです。



写真2. 秋のタカ渡りの先陣を切るハチクマ



写真3. 秋の渡りの主役ノスリ



写真4. ハイタカ類でもっとも多く観察したツミ

<小鳥の渡り>

白神岬での渡り観察のもう一つの魅力は、非常に多くの小鳥の渡りが見られることです。特筆すべきはカラ類で、1日で2500羽を超えるヒガラをカウントしたこともあります。カラ類やヒヨドリは一度にまとまった数が山を越えて観察地点に飛んでくるので、自分が小鳥の川の中にいるような経験をすることができ、非常に刺激的です。9月ごろはヒガラが最も個体数が多かったのですが、10月に入るとシジュウカラが増えることもわかりました。同じカラ類でも種によって渡りのピーク時期は異なるようです。

また、北海道で留鳥とされている鳥が津軽海峡を越えていく様子を観察できることも魅力です。その代表はアカゲラで、海峡へ飛び出す個体は多くないものの、複数の渡りと思われる個体を観察しました(写真5)。海へと一直線に飛び出していくアカゲラを見ていると、「亜種エゾアカゲラって何なのだろう」という疑問を抱かずにはいられません。



写真5. 渡っていくアカゲラ

2023年に多くのタカの渡り観察地で観察されたホシガラス(写真6)も、渡り個体を複数観察しました。頭上で旋回するハチクマを眺めていると、そのさらに高空を飛翔する数羽のホシガラスを観察したことがあり、かなりの個体数を見逃しているのではないかと思います。

秋が深まると、鳥種がヒタキ類や大型ツグミ類からアトリ類などの冬鳥へとシフトしていく様子も面白いです。特に昨年はウソが目立ち、そこに交ざって飛翔するナキイスカの雄を観察したこともあります。また、サンショウクイなど、北海道で見かけることの少ない、本州の普通種とされている鳥が渡る様子を見られる点も面白さの一つだと考えています。

2023年は記録的な夏の暑さによる木の実の不作のせい

か、秋に山から移動する小鳥が多く見られたと感じています。その分秋に渡る小鳥が多く見られ、楽しい観察を行うことができましたが、今年もこのような光景が見られるかは定かではありません。津軽海峡を越えて渡っていった鳥たちが無事冬を越えていることを祈るばかりです。



写真6. 渡り前に樹上で休息しているホシガラス

<留鳥観察も面白い>

白神岬周辺には居付きのクマタカが数羽生息しており、タカや小鳥が飛ばない時間の観察を埋め合わせてくれる存在です(写真7)。ペアで飛翔している様子も観察していることから近くで繁殖しているものと思われますが、深追いせずそっと見守りたいものです。

キツツキ類も一通り見ることができ、数は少ないもののクマゲラを見ることもあります。ぜひ北海道にいないとされているアオゲラを見てみたいのですが、今のところ観察できた緑色のキツツキはすべてヤマゲラでした。

ここには数は多くないものの、エゾライチョウも生息しており、こうした国内ではほぼ北海道でしか見られない種を探すことも白神岬での鳥見の魅力だと思います。



写真7. 白神岬に生息するクマタカ

<おわりに>

白神岬での渡り観察、秋の渡りにしぼってまとめてみましたが、その雰囲気を感じていただけたでしょうか。

春には津軽海峡を移動するアビ類の中にハシジロアビが見られたり、多数のハシボソミズナギドリが見られたりと、海鳥観察も面白いのが白神岬の特徴です。函館から車でさらに2時間かかるため、アクセスしにくい立地ではありますが、機会がありましたらぜひ野鳥観察に訪れてみてください。

もし白神岬で面白い渡り行動や、貴重な種を観察されたらご教示いただけますと幸いです。

《図鑑の役割》

改訂版『さっぽろ野鳥観察手帖』の制作を通して

札幌市南区 河井大輔

拙編著『北海道野鳥図鑑』(写真1)は2003年に初版を、2013年に新訂版を刊行しました。新訂の折、初心者向けに基本100種を抽出したベストセレクション版を制作できないか？との打診を出版社から受けましたが、巷間には鳥の図鑑があふれており、どこか既視感のあるものになってしまいそうで、正直あまり気乗りがしませんでした。

ただ同書はA5版で400ページもあったので「もう少し気軽なものを」というニーズについては理解できました。そこで「北海道」ではなく、あえて「札幌」(=「都市圏」の象徴)を対象にしたものを手掛けることにしました。それが2019年刊の『さっぽろ野鳥観察手帖』で、このたびその改訂版(写真2)を上梓しました。



写真1. 新訂 北海道野鳥図鑑

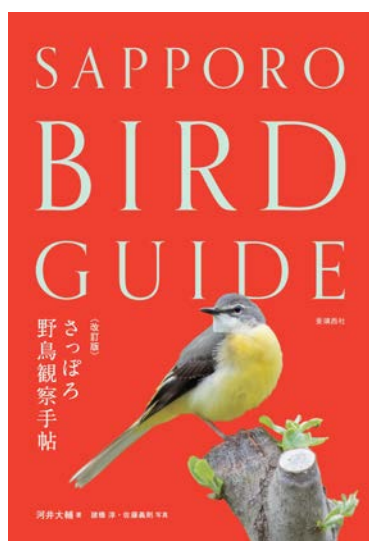


写真2. 改訂版 さっぽろ野鳥観察手帖

＜新しい読者層の開拓＞

県や島嶼レベルの地方図鑑はいくつかあるものの、一地方都市圏を対象にした書籍は珍しいのではないかと思います。「緑地の鳥」を主とすることで、掲載種を比較的身近な鳥123種に絞ることができ、また「有名ではあるけれど都市圏では減多に見られない鳥」を対象外にすることができました。北海道の鳥ベスト100においてシマフクロウやタンチョウ、エトピリカ等を取り上げないわけにはいきませんが、札幌圏ならOKです(もっとも近年、タンチョウの札幌圏での観察例は増えてきているようですが)。

想定読者層(図1)は、いわゆるバーダーと呼ばれるようなコアな「関心層」ではなく、「やや関心がある」「関心がないわけではない」といった人たちがターゲットに含めました。従来のタイプの図鑑では振り向いてもらえなかった層の＜開拓＞も、新しい図鑑の役割ではないかと思ったからです。その目標への指針を得るため、制作前に改めて新旧の野鳥図鑑50冊ほどに目を通してみました。



図1. 想定読者層

どの図鑑を見ても、概ね、そのフォーマットは決まっています。それに合わせ写真やイラスト、解説をはめ込んでいくのが基本パターンなわけです。たとえばピーターソンのフィールドガイドスタイル。見開きの片側1ページに鳥のイラストが＜標本＞のようにずらりと配置されたレイアウトは、野外識別のためのツールに特化していて、たいへん便利です。でも、少々無機質な印象も否めません。色彩や形状以外の魅力は、伝わりにくいような気がします。

一方、近年主流の写真図鑑(写真3)では写真1点から数点を配置、専門性の高いものになればなるほど、隙間を埋めるようにびっしりと情報が並びます。識別ツールとしての実利性を考えて帰結したデザインでしょう。見やすいとはいえないものの、その圧倒的情報量ゆえに多くの読者から支持されています。しかし「やや関心がある」くらいの読者からみると、逆にその迫力に気圧されてしまいます。「自分にはここまで必要ないかなあ」と引き気味にさ

せてしまうのです。総じて「図鑑とはこういうものだ」というセオリーの放つ雰囲気、良くも悪くも読者を限定してしまっているように感じました。



写真3. 北海道野鳥図鑑のアカゲラのページ（左）。四角い写真を規則的に並べた従来型のレイアウトパターン

＜眺めて楽しく、読んで面白く＞

専門の図鑑に＜数居の高さ＞を感じている読者にも気軽に手に取ってもらうようにするためには、まずページを眺めているだけでも楽しめるという「親しみやすさ」が必要です。そして鳥を見分けることの楽しさや生態の面白さについても、ちゃんとわかりやすく伝えられる情報面との両立が課題となります。

そこで取り決めた制作方針は二つ。ひとつは斬新なページレイアウトを目指すこと。図鑑によく使われる四角い写真はいっさい用いず、また鳥だけを切り抜いた無機質な写真もNGとしました。識別・生態・美観に基づいて厳選した全ての写真に、レイヤー（階層）を重ね合わせた背景処理を施すことで、鳥の姿を浮かび上がらせました。そして見開きで＜一枚の絵＞として見せられるよう、三角構図を常に考慮した写真配置としました（写真4、5）。

これは1種ずつ個別にページを作成していくという途轍もなく面倒な作業です。そんな依頼を引き受けてくれるデザイナーなどいるのだろうかと不安になりましたが、幸運にもその任を引き受けてくれる人に恵まれました。

もうひとつの方針は、新味のある解説にすること。すなわち読んでいて楽しい図鑑です。専門用語を極力使わず、



写真4. さっぽろ野鳥観察手帖「アカゲラ」。三角構図に配慮し、見開きで＜一枚の絵＞となるような構成に

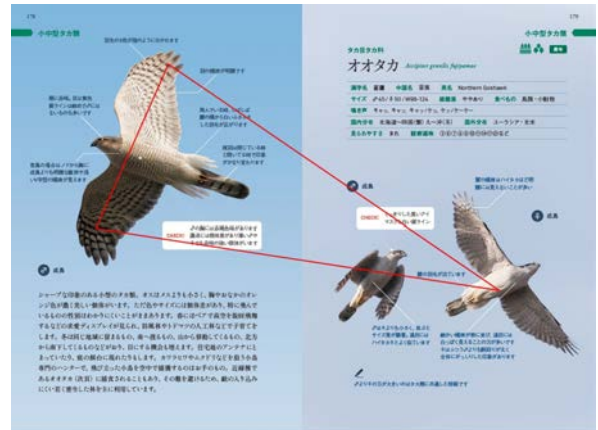


写真5. 野鳥2種が混在するページ（左ハイタカ、右オオタカ）でも全体の印象を配慮した三角構図としている

解説というよりは、あえて読み物調に。識別情報の羅列ではなく、その鳥の＜魅力＞を伝えられるよう努めたいと思いました。図鑑としての基本任務を果たしつつも、読者の胸のうちに「こういう鳥なら、そのうちどこかで逢えたらいいな」と思ってもらえるような、いうならば＜鳥好き＞をひとりでも増やせるような役割も持たせたいと思ったのです。書名をあえて「図鑑」とはせず「手帖」としたのも、そんな理由からでした。

表紙のデザインは海外の洒脱な図鑑をモデルとしました。カバーの色も、自然系の書籍は緑系が多いというセオリーに反して、訴求性の強い＜紅＞をあえて選択。こんなハデな色づかいの野鳥図鑑は、少なくとも国内では前代未聞のはずです（笑）

＜新しい図鑑の果たす役割＞

旧版の刊行後4年を経て、昨年（2023）末に、おかげさまで改訂版を出せることとなりました。種としては、近年札幌圏で増加しているにも関わらず旧版では未収録であったダイサギを加えたのみなのですが、またぞろセオリー破りの構成で、6ページを使って紹介しています。その解説には、本会の樋口孝城さんが会報に寄せられていた報文も参考にさせていただいています。

そもそも、初版刊行時の販促イベントに参加してくれた小学生が「なぜシラサギが載っていないの？」と質問してくれたことが今回の改訂版のきっかけとなりました。その小学生も、この春には高校生。実は増補したダイサギのページには彼の撮った写真を掲載させてもらっています。書籍制作を通じて読者が生まれ、その読者からのお力添えも手伝ってリニューアル版を刊行できたということは、著者として本当にありがたく、幸せなことだと思います。

本書は、先ごろ鬼籍に入られたナチュラリスト松田道生さんから「美しい図鑑の役割」と題し、日本野鳥の会の会誌『野鳥』に書評を掲載していただいたことがあります。松田さんはそこに「図鑑の果たす役割が、ただ名前を調べるだけではないことを教えてくれる図鑑です」と書いてくださいました。このような評価を頂戴できただけでも、制作した甲斐があったというものです。書店の棚に、もし紅くてオシャレな表紙の本書を見つけたら、どうぞご覧になってみてください。

石狩浜におけるヨーロッパムナグロ秋季の観察記録

岩見沢市 先崎 愛子

2020年9月26日から27日にかけ、石狩市の石狩浜東埠頭東側の砂浜においてヨーロッパムナグロ1羽を観察しましたので報告いたします。

<特徴の白い脇羽を確認して判断>

9月26日の午後5時ごろ、日没近くなり薄暗くなった東埠頭東側の浜で、ダイゼン1羽と一緒にムナグロに似た1羽がいるのに気が付きました。個体を双眼鏡でのぞいて見ると、嘴と脚は黒く、頭部や上面は黄褐色と黒褐色のまだら模様で、顔から胸は淡黄褐色、腹から下尾筒は汚白色という一見ムナグロの特徴をもつ個体です。

しかし、顔つきや体形に違和感を覚えて混乱しました。というのも、嘴は普通のムナグロよりも短く、目が大きいことから可愛い顔つきに見え、脚は短くずんぐりとした印象を受けたからです。

ムナグロよりも嘴が短い特徴から、最初にアメリカムナグロが頭をよぎりましたが、アメリカムナグロであれば脚は長く、黄色味が弱い体色で、眉斑の白色が目立つはずでした。しかし、本個体は脚が短いことに加え、体の色味がはっきりとした黄色であったことから、ヨーロッパムナグロではと考えました。

日没が迫り辺りが暗くなっていく中、なんとか本種の最大の特徴である真白い翼下面と脇羽を確認できないかと焦りながら待ち、全身羽振いの瞬間を撮影しました。きちんと写っているかどうか不安なまま帰宅し写真を確認してみると、幸運にも白い脇羽が撮影できていました(写真1)。

自宅ではあらためて、鳥に詳しい夫の啓亮さんと当会広報幹事の先崎理之さんにも一緒に特徴を確認してもらい、ヨーロッパムナグロであると判断できました。



写真1. 発見時のヨーロッパムナグロ。脇羽の白色を確認した
2020.9.26 石狩浜東埠頭東側

翌27日、はやる気持ちを抑え、まだ暗い日の出前に浜に到着して探すとまだ滞在しており、仲間も駆けつけ一緒に行動を観察することができました。

個体は丈の低い草本がまばらに生える泥状の浜で休み、その後は波打ち際に移動し時折ダイゼンと行動を共にしながら採餌していました(写真2)。

短く飛翔する時には「ピーッ」と柔らかい声で鳴きました。また、ムナグロであればふつう飛翔時には脚先が尾羽から突出しますが、本種の特徴である尾羽から脚が突出しない様子も確認できました。

静止時には最長三列風切からの初列風切の突出が4枚に見えることが多く、個体の年齢については、体全体の羽は摩耗が少なく模様が整然と並んでいること、腹部から脇腹にかけて細かい灰褐色の斑が入ることから、幼鳥であると判断しました。その後、午前6時40分ごろに大きく堤防を西側へ越えて飛翔し、終認となりました。



写真2. ダイゼン(後ろの個体)と一緒に採餌するヨーロッパムナグロ
2020.9.27 石狩浜東埠頭東側

<道内2例目の記録>

本種は日本鳥類目録改訂第7版で迷鳥とされ、これまで2011年9月30日から11月7日の沖縄県金武町における記録が記載されています。

今後、改訂第8版においては2009年12月6日と2012年2月の石川県河北潟での記録のほか、佐賀県および千葉県との記録が追加される見込みです。

北海道においては2020年4月11日から12日に先崎理之さんにより石狩浜東埠頭東側の浜で初めて記録されました。今回の個体はその年の同じ場所における道内2例目の観察で、秋季の初の記録となりました。初記録の個体は第1回冬羽から夏羽へ換羽中の個体で、今回の個体は幼鳥であることから別個体と考えられます。

本種の越冬地はヨーロッパ南西部からアフリカ地中海沿岸ですが、希に迷行して東アジアで越冬する個体がいるようです。今回の個体も越冬地へ渡りを行う途中に石狩浜に立ち寄ったと考えられます。

石狩浜は渡りの時期に数多くの多様なシギチドリの群れを見ることができ、渡りの重要な中継地です。しかし、近頃は放置されたゴミの影響でけがをしている鳥を見掛けることがあるため、探鳥のついでに針付きの釣り糸などのゴミを拾って持ち帰るようにしています。今後も石狩浜が、鳥たちが安心して立ち寄ることのできる休憩場所であってほしいと願ってやみません。

野鳥 情報コーナー

札幌でニシオジロビタキの観察

札幌市手稲区 満保 彩女



ニシオジロビタキ 2023.11.11 札幌市手稲区

2023年10月25日から11月22日にかけて、札幌市手稲区の公園でニシオジロビタキを観察し撮影することができました。10月25日は天候が良くツグミやカラ類などが活発に飛び回る中、低い小枝から地面に降りて虫を採取している小鳥が目に見え、飛び込んで来ました。最初は行動がヒタキの仲間に似ていたため、ルリビタキではないかと思いましたが、数枚写真を撮り帰宅後に調べたところ、ニシオジロビタキかなと思いつつも、特徴となる嘴の色や尾の裏側の色、上尾筒などがはっきりと写っている写真が1枚もなかったため、この時点では断定することができませんでした。

いったん見かけることはなくなったものの、2週間以上経った11月11日に再び姿を確認することができました。今度は嘴の下が黄色っぽいこと、尾の裏側3分の2が白いこと、腹部が白っぽいなどの特徴をはっきりと確認することができたうえ、知り合いのベテランバーダーの確認も得た結果、ヨーロッパ中部で繁殖し、アフリカ北部やインドで越冬するニシオジロビタキとの結論に至りました。近年、本州各地で観察され、道内でも数例の観察例があるようですが、日本鳥類目録改訂第7版では検討種です。

この日から連日見られるようになり、公園にも人の動きにも慣れたようです。当初強かった警戒心も薄れ、道端に突然現れたり、フェンスやベンチの背もたれに止まって虫を捕ったり、行動範囲も広がって最終的には公園内全域で姿を現すようになりましたが、11月22日夕方に確認したのを最後に姿を見かけることはなくなりました。

愛らしい姿で私達を魅了してくれたニシオジロビタキに心から感謝致します。無事に越冬地に辿り着き、再びお気に入りだった場所に元気で戻って来てくれることを願わずにいられません。

コノドジロムシクイ 道央初記録について

埼玉県川越市 堀 琴音



コノドジロムシクイ 2020.11.4 千歳市

2020年11月4日、道央の大学生だった私はカモ類の観察のため千歳市の千歳川沿いを訪れていました。対岸にジョウビタキを発見したため双眼鏡で観察していると、視界の外からひょいとジョウビタキの近くに小さな鳥が飛んできました。

大きさはジョウビタキと比較しやや小さく、腹部は褐色を帯びた白色で、背部や翼は褐色、頭部は灰色、目先から頬にかけては黒褐色、喉は白色でした。また、目の下側のみの白いアイリングが目立っていました。加えて観察中、「チャッ、チャッ」という特徴的な地鳴きを聞くことができ、コノドジロムシクイと判断しました。

滞在中はイボタノキの仲間、マサキ、ツルウメモドキなど、木の実のなる背の低いごちゃごちゃとしたブッシュの中や低木の針葉樹の中を素早く動き回り、見やすい場所に出てくることは殆どなく、撮影に苦労しました。

また、発見時はジョウビタキの近くに現れましたが、特定の他種の鳥と共に行動している様子はなく、単独で行動していることが多かったです。発見から、数日は現地に滞在しましたが、1週間足らずでいなくなっていました。

本種はヨーロッパから中近東、中央アジア、モンゴル、中国北部にかけての広い範囲で繁殖し、冬はアフリカ北東部からイラン、インドへ渡ります。1994年10月に函館市にて行われた鳥類標識調査で捕獲され日本初記録となり、その後北海道では天売島、根室市、網走地方で観察記録がありますが、道央圏では本記録が初記録と思われます。

本記録は4年前の観察ではありますが、記録として残していないことに気がつき、かつて探鳥会や講演会に参加したことのある北海道野鳥愛護会の野鳥だよりに掲載しました。

キガシラシトド 根室での記録

北海道大学生命科学院 1年 内田 耕平



キガシラシトド 2021.2.13 根室市花咲港

2021年2月13日15時50分頃、根室市花咲港の水産加工場裏手の空き地で、業務用コンテナにあまり見慣れない鳥が止まっているのを見つけました。その外見からとっさに識別することができませんでしたが、全体的に灰色味が強く不明瞭ながらも頭頂部には黄色味が認められることからキガシラシトドと判断しました。日暮れ間近であり長時間の観察はできませんでしたが、道東鳥見旅行4泊5日の良い幕引きとなりました。その後、同所を訪れた複数名によって2月18日、19日、22日、23日と全く同じ場所で観察されました。私の観察時は単独での行動でしたが、スズメの小群と共に地面で採餌を行う姿も確認されています。

本種はアラスカとカナダ北西部で繁殖し、アメリカ西部で越冬します。北海道での記録は1988年4月根室市西浜町と2000年1月根室市東梅（高田 2001）、2006年3月釧路管内浜中町湯沸と2015年11月から2016年3月浜中町湯沸（片岡 2016）、2019年4月オホーツク管内興部町（日本野鳥の会オホーツク支部ブログ）、2020年2月同管内小清水町止別（NPO法人 オホーツク自然・文化ネットワーク ブログ）の6例が知られています。この個体が翌年も渡来する可能性も考えましたが、翌年、翌々年と観察することはできなく、時間を置いての寄稿となりました。

引用文献

片岡義広2016. 庭で越冬したキガシラシトド.北海道野鳥だより(184):6.

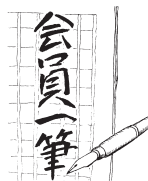
高田令子 2001.根室支庁管内鳥類リスト. 根室市博物館開設準備室紀要(15):113.

日本野鳥の会オホーツク支部ブログ.

<http://wbsj-okhotsk.org/blog/?p=13791>

NPO法人オホーツク自然・文化ネットワークブログ.

<https://o-nature-culture.net/2020/03/07/今日の野鳥-26/>



人生2度目のアレ モリムシクイとの出会い

札幌市豊平区 佐伯 武美



モリムシクイ 2023.11.30 豊平公園

パソコンを覗き込んだ妻に「何という鳥なの?」と訊かれ、暫し絶句。頭の中の名前が像を結ばないのです。「アレさ ほらアレ」傘寿を迎えた頭脳は歳相応の機能になっていました。

2023年11月30日、私のスマホが震えました。鳥友のせき込む声に急かされ、札幌市豊平区の豊平公園に向かいました。カメラが10台ほど。珍鳥出現にしては少ない訳はすぐわかりました。「2週間ぐらい前から」と、知り合いの愛好家。

「アレ」はレモンイエローの上面と純白の腹部を震わせて、ホバリングを繰り返していました。肩に食い込む望遠レンズの重みを通して、7年前の可憐な姿が蘇りました。

2016年12月、私はこの公園に近い「マイフィールド」天神山緑地のカラマツ林に、モリムシクイの姿を見たのでした。北海道ではそれまで文献の上で1例しか記録されていなかった珍鳥。1度ならず2度までも引き合わせてくれた幸運をなんと表現してよいものやら。繁殖地のヨーロッパを後にして、アフリカなどの越冬地に向かうべきが、厳冬の北海道になぜ迷い込むのか。北海道大学の先崎理之准教授は、秋なのに春のように北上してしまう「リバースマイグレーション」に言及されています。

後日譚、12月4日に豊平公園から姿を消したと思われた「アレ」モリムシクイに10日、天神山でまさかの再会。2023年は「サブライズエンディング」で幕となりました。

※会員一筆は写真1枚、600字以内で

dayoriaigo@gmail.comまでお寄せください。

私の鳥見スタイル

木版画とシマエナガの思い出

江別市 木版画家 酒井睦子^{あつこ}

「あそこにいるのがシマエナガっていう鳥だよ」。小学校へ向かう途中、雑木林を指さして私の年子の姉が言いました。とても小さく尻尾の長い白い鳥、世の中にはこんなに可愛い鳥が存在することを初めて知った瞬間でした。ちょうどその頃、1977年に北海道野鳥愛護会の会長でもあった故井上元則先生が、日本野鳥の会江別支部を設立しました。家族で入会し野幌森林公園の探鳥会にご一緒したこともあり、よく図鑑を見ていた姉は小さな野鳥博士でした。しかし野幌森林公園は子供だった私たちにとっては通えない距離にあり、姉の熱量に圧倒された私が野鳥に夢中になるのはもっと先のことでした。



シマエナガ

それから月日が流れ、知人の誘いがきっかけで20代前半から山登りや森歩きが趣味になりました。車と運転免許も手に入れた私にとって、野幌森林公園は思い立ったら10分で行ける身近な場所となっていました。双眼鏡をぶら下げ森を歩き、今まで図鑑で見ていた鳥が目の前に現れた時の感動に心を震わせ、私はすっかり野鳥の虜になりました。

時を同じくしてもう一つの出会いがありました。手島圭三郎先生の木版画絵本「しまふくろうのみずうみ」を本屋さんで見つけたのです。近くのギャラリーで原画展が開催されると知り早速観に行きました。画面いっぱいに羽ばたくシマフクロウの迫力と、森の奥に佇む湖とシマフクロウ親子の静謐な世界に魅了され、自分も木版画をやってみたくなったのです。

その後、結婚して江別を離れ少し時間ができたので、NHK学園の通信講座で木版画の基礎を1年間学びました。受講を決めた私には一つの小さな目標がありました。それは木版画で年賀状を作ることです。育児で大変な時期もありましたが、子供達が寝静まった後で大好きな野鳥をモチーフに板木を彫り、多い時で300枚もの年賀状を刷りました。子供達が大きくなってみんなで木版画の年賀状を作るのが我が家の恒例行事になったこともあり、今ではとても懐かしい思い出です。



カワセミ

20年ほど前に再び地元江別に引越してきました。子供達と訪れた図書館で大麻木版画同好会のポスターが目に入りました。講師はなんとあの手島圭三郎先生、帰宅後すぐに代表の方に入会のご連絡をしました。自分が木版画を始めるきっかけとなった絵本の作者から直々に版画を教えてもらえるなんて、なんと幸運なことでしょうか。入会してからは年賀状だけでなく少し大きめの作品にも取り組むようになりました。気が付けば、自然好きの子供達と時々訪れる野幌森林公園は、野鳥観察に加えて木版画の題材探しの場にもなりました。

私が木版画制作で一番大切にしているのは、野鳥を見つけた時の感動やその場の空気感を作品に込めることです。森へ入る時は必ず観察のための双眼鏡と記録のためコンパクトカメラを持ち、見た鳥とその時の周りの景色や植物を組み合わせ作品を作ります。最近ではすっかり知名度の上がったシマエナガも思い入れの深いモチーフとしてよく作っています。まさかこんなに人気が出てカメラマンに追いかけて回される野鳥になるとは、当のシマエナガも思わなかったことでしょう。四十数年前の雑木林でひっそりと暮らしていたシマエナガを思い出すたび不思議な気持ちになるのです。



キクイタダキ

.....
(編集部) 酒井睦子さんはAccotoriの作家名で活動しています。
<http://www.accotori.com>

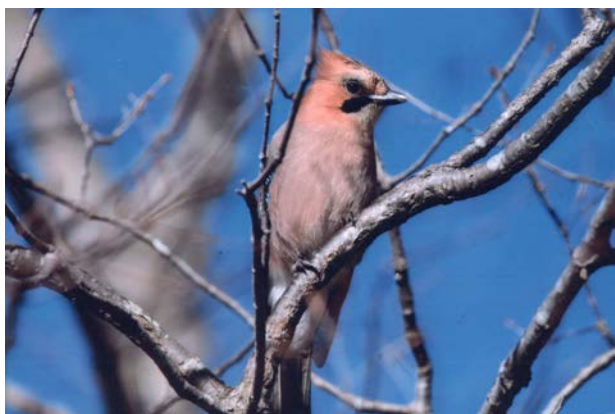


冬季の湖畔、森林、海岸でこの時期らしい探鳥を楽しみました。コロナ禍で3年間連続の休止を余儀なくされた小樽港探鳥会(貸し切りバス利用)が再開されたことが特筆されます。

ウトナイ湖

2023.11.12

苫小牧市 山口 源起



カケス (亜種ミヤマカケス) 筆者撮影

もともと生き物が好きで高校生の時に写真撮影が趣味になりました。今回初めて野鳥観察に参加させていただきました。最初はドキドキしましたが、周りの方々が気さくに話しかけてくださり、すぐに馴染むことができました。

その日、一番最初に撮った野鳥はカケス(亜種ミヤマカケス)でした。頭が赤オレンジで黒い目が印象に残っています。見た目の愛らしい姿と異なり、鳴き声がしわがれ声だったので驚きました。

その次に見た野鳥はイスカでした。ここで野鳥に詳しい方からイスカは個体ごとにくちばしの交差の仕方が違うことを教えていただきました。



イスカ 早坂泰夫さん撮影

湖を見渡せるところに来ると、マガモの群れが見えました。姿をカメラで撮ろうと思いましたが、逆光でうまく撮れません。少し離れたところにダイサギ2羽がいました。遠目で見るとハクチョウにも見えてましたが、体の大きさや、飛んだ時の体勢が違うことを知りました。

周りでエナガ(亜種シマエナガ)の姿も見ることができました。カメラを向けましたが、飛び回っていて撮ることはできませんでした。でも、その姿が見られただけでもうれしかったです。

先に進むとハシブトガラ、ゴジュウカラ、アカゲラ、シジュウカラの姿を見ることができました。鳥たちの鳴き声も可愛らしく、木を突く姿も愛しかったです。

さらに先に進むと、藪の中から鹿の姿が見えました。遊歩道のそばでコゲラが木を突いていました。夢中になっていたのか、人が近くにいても逃げませんでした。

近くで見たコゲラは白と黒の羽、体が白と薄茶色、目が黒く、とても可愛い姿でした。



コゲラ 筆者撮影

そのあとも湖が見える場所で様々な野鳥に出会いました。遠くの方にいましたが、肉眼では見つけることができませんでした。望遠鏡で見せていただいて遠くにいる野鳥の姿を見ることができてとてもうれしかったです。まだまだ私の知らない野鳥がたくさんいるなと思いました。野鳥に詳しい方と一緒に観察をしてとても貴重な経験をすることができました。本当にありがとうございました。

【記録された鳥】ヒシクイ、コブハクチョウ、コハクチョウ、オオハクチョウ、ヒドリガモ、マガモ、ホオジロガモ、カワウ、ダイサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ハイタカ、オオタカ、ノスリ、コゲラ、アカゲラ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、カワラヒワ、イスカ

以上32種

【参加者】石塚 肇・鈴子、飯泉真菜、猪俣行美、大垣創、北山政人、小林由尚・麻希・蒼都・ことは、近藤章子、坂口俊人、田原哲也・美幸、辻 雅司、鳥谷峰 修・心、畑 正輔、早坂泰夫、丸勢文現・亜希子、南 貴和子、山口真紀子・源起、湯浅大輔・創太、鷺田善幸 以上27名

【担当幹事】北山政人、鷺田善幸

野幌森林公園

2023.12.3

ヒグマの出没で、3回連続で中止となった探鳥会を再開できました。風のない穏やかな天候でしたが、カラ類の混群も少なくシメ、ウソなどの冬鳥も確認できませんでした。それでも、開始早々、入り口そばのヤドリギの実を食べていたヒレンジャクとキレンジャクの群れを参加者全員で見ることができました。キバシリも2度ほど現れ、近くにいた参加者が確認できたのは収穫でした。



ヤドリギの実を食べるヒレンジャク 大垣 創さん撮影

【記録された鳥】 トビ、ハイタカ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ 以上16種

【参加者】 池端耕治、石塚 肇・鈴子、飯泉真菜、今村三枝子、大垣 創、大橋路子、栗林宏三、佐川健次、種川真希子、忠岡公治、田原哲也・美幸、田守真一・敦子、辻 雅司、道場 優、富川 徹、畑 正輔、早坂泰夫、福士一徳、松原寛直・敏子、南 貴和子、森田康志、横山加奈子、吉田 功、吉田慶子 以上28名

【担当幹事】 道場 優、富川 徹

野幌森林公園

2024.1.7

江別市 高柳 真由美

今年最初の探鳥会は、地元の野幌森林公園でした。昨年の熊出没騒動以来、個人的には5カ月ぶり、私自身の探鳥会参加は2回目と言うことで、どんな野鳥に出会えるだろうと楽しみに、この日が来るのを待ちました。

当日朝、集合場所で待機していると、私たちを歓迎するかのようにカラ類に混じってエナガ（亜種シマエナガ）が飛来、これは幸先良いなと期待を胸に、探鳥会がスタートしました。曇りがちな中にも所々青空がのぞく天気の下、

今の時季にしては珍しく寒さの緩んだ公園を歩いていると、キレンジャクの群れに遭遇、それぞれに盛り上がり、撮影&観察開始です。沢に降りて水を飲む様子は滅多に見られないとのことなので、カメラに収められなかったのは残念でしたが、そんなレアな瞬間に出会えたことをうれしく思いました。



キレンジャク 中村 隆さん撮影

それから暫く行くと今度は十数羽のトビの群れが上空を通過、圧巻でした。

探鳥歴3年、よく見掛ける野鳥の名前は覚えましたが、図鑑無しで判別できる野鳥はまだそう多くはありません。今回参加して、鳥名は勿論のこと、野鳥の生態にも詳しい先輩方から色々と解説していただき、とても勉強になりました。また、立ち入り禁止のテープを無視して進入、撮影するウオッチャーがいると聞き、残念に思いました。最低限のマナーは身に付けたいですね。

当日は、コゲラ、アカゲラ、オオアカゲラと見られたので、次、クマゲラ来るか、と期待しましたが、途中から予報通りの雪模様となり、野鳥も見られなくなったため、残念でしたが今回は諦めました。

野鳥との出会いはタイミングで、初見の野鳥を発見した時の高揚感、目的の野鳥に会えなかった時の残念な気持ちと「次こそは」と期待する気持ちが、私を野鳥観察へと駆り立てるのです。

今回、充実した時間を過ごせたことに感謝致します。ありがとうございました。

【記録された鳥】 トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、キレンジャク、ゴジュウカラ、キバシリ、ミソサザイ、ツグミ、ベニヒワ、シメ 以上19種

【参加者】 青木武男・あけみ、磯田憲和、今村三枝子、栗林宏三、小西美美枝、近藤章子、高柳松蔵・真由美、辻 雅司・方子、富川 徹、中村 隆、早坂泰夫、林 仁子、平田修二、松原寛直・敏子、右谷 誠、武藤幹太・大翔、山本育子、横山加奈子、吉田慶子、吉永和世 以上25名

【担当幹事】 富川 徹、早坂泰夫

小樽港

2024. 1. 21

札幌市南区 古川 浩子



シノリガモ 中村 隆さん撮影

いつも一人であちこち歩いて鳥見をしているのですが、冬の沿岸はハードルが高いなあ…と思っていたら小樽港探鳥会があると知り参加させていただきました。1人だったら引き返していただろう雪道も、みんなで歩くと道になって歩けました。海を見渡すと、カモメ類がたくさんいて、ウミウに交じってヒメウがいたり、海面にはシノリガモやトドも顔を見せました。灯台へは氷点下5度の寒さで強風だったので、顔も痛くて一步一步がづらい登りでした。

漁港を回るとワシカモメ、ウミアイサ、ホシハジロ、カンムリカイツブリや、ホオジロガモ、スズガモ、キンクロハジロなどのカモ類もたくさんの種類が見られ、空をオジロワシが飛んでいました。



ハギマシコ 筆者撮影

昼食時には幹事の方に声をかけていただき、どんな野鳥図鑑がいいかなども教えてもらえました。1月10日に札幌市南区の北の沢川でタシギと思って撮っていた鳥も、アオシギである事を教えていただきました。

今回の探鳥会では、オオハム、アビ、ウミスズメが見られなかったのが心残りですが、最後にハギマシコの群れに出会えて皆さんも盛り上がり、鳥合わせをして帰路につき

ました。また機会があれば参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

【記録された鳥】 マガモ、カルガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、カンムリカイツブリ、ヒメウ、ウミウ、ウミネコ、ミツユビカモメ、カモメ、ワシカモメ、シロカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、スズメ、ハギマシコ、カワラバト (ドバト) 以上26種

【参加者】 池田光優・紀美江、石塚 肇、今村三枝子、岩井 茂、白田 正、浦野真理子、尾崎芳明、住田瑞生、北山政人、栗林宏三、小林 恵、小林麻希・蒼都、齊藤潤太郎、佐野純子、志田博明、品川睦生、菅原智恵美、杉山次郎、鈴木幸弥、辻 雅司・方子、中田勝義、中村 隆、中村若葉、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、古川浩子、本間康裕、丸島道子、丸勢文現・亜希子、水落ゆき子、武藤幹太、吉田慶子 以上38名

【担当幹事】 北山政人、栗林宏三、鈴木幸弥、畑 正輔

野幌森林公園

2024. 2. 4



エナガ (亜種シマエナガ) 藤吉 功さん撮影

寒いながら穏やかな天候でした。最後のカツラコースの坂のあたりでカラ類の混群に出会い、キバシリ、エナガ、オオアカゲラなども観察できました。

【記録された鳥】 コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ 以上14種

【参加者】 阿部 徹、石川 徹、浦野真理子、大橋雅浩、栗林宏三、小西美美枝、住田瑞生、高橋貞夫、高橋みのり、田原哲也・美幸、辻 雅司、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、半田 豊、福士一徳、藤吉 功、松原寛直・敏子、南 貴和子、横地治雄、横山加奈子、吉田慶子、米田心美 以上25名

【担当幹事】 早坂泰夫、藤吉 功

鳥 民 だ よ り

◆新年講演会 4年ぶりに開催◆

コロナ禍で中止してきた新年講演会・写真映写会を1月13日に4年ぶりに開催、59名（会員：45名、会員外14名）が参加しました。



2024.1.13 かでる2・7（札幌市中央区）

講演では、当会副会長で日本鳥類標識協会の富川徹氏が「宮島沼の鳥たちの渡りを語る～鳥類標識調査の結果から」と題して、マガンだけではない宮島沼を通過する多彩な小鳥の魅力について語りました。

標識調査の基礎知識の解説から始まり、これまでにどんな鳥がどのくらい標識されたかなどがグラフをまじえて示されました。標識調査中のアオジやカシラダカなどのクローズアップ写真は見ごたえがあり、宮島沼の鳥類リストからは、宮島沼保全の重要性を実感することができました。



講演する富川 徹 副会長

このあと、会員7名（新城 久、白田 正、北山政人、道川富美子、早坂泰夫、高橋良直、武藤幹太）が撮影した野鳥の写真が上映されました。

◆野鳥写真展と写真募集のお知らせ◆

会 場：札幌エルプラザ 1階 情報センター
（札幌市北区北8条西3丁目）

期 間：2024年5月10日（金）～5月23日（木）

展示時間：9：00～18：00

（初日13：00から、最終日16：00まで）

応募要領：3年以内に原則、北海道内で撮影したA4判写真。鳥名・撮影者・撮影年月・撮影場所を必ず添付のこと。1人2枚以内とし、3枚以上の場合は展示優先順位を明記。

募集締切：4月25日（木）まで必着で送付または持参。

〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38

北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 宛

【野幌でも開催】野幌森林公園自然ふれあい交流館で6月1日（土）～30日（日）まで展示を予定しています。

【お願い事項】

（1）作品を、愛護会ホームページに掲載しますので、JPEGデータを下記へメール添付で送付してください。

総務 辻 雅司：E-Mail：mtsuji@eagle.ocn.ne.jp

（2）作品の返却が必要な場合、最終日に自分で回収するか、返却方法を必ず申し出ください。

＜返却方法＞ 以下のいずれかを応募時に指定ください。

（1）最終日（6月30日）に自分で回収、または自然ふれあい交流館で7月14日までに自分で回収。

（2）9月発送の野鳥だよりに同封。

【展示作業】

5月10日（金）10：00から展示作業を行います。お手すきの方はご協力をお願いします。

【お問い合わせ】総務 畑 正輔

TEL：090-3117-4261：ショートメール可

E-Mail：hata2002@lapis.plala.or.jp

◆総会のご案内◆

日 時：2024年4月10日（水） 14：00

場 所：かでる2・7 110会議室（1階）

（札幌市中央区北2条西7丁目）

【お問い合わせ】総務 畑 正輔 TEL：090-3117-4261

【新しく会員になられた方々】

猪俣 行美 札幌市豊平区

山本 肇 札幌市豊平区

小森 健一 江別市

満保 光彦・彩女 札幌市手稲区

匿名希望（家族2名）

表紙の鳥

ベニヒワ

2023年12月に札幌市東区のモエレ沼で人生初見のベニヒワに出会いました。残念ながら遠くて一瞬でした。1月になってから市内のいくつかの場所で見ることができるとの情報があり、もう一度見たいものと思っていたところ、南区の真駒内公園でしばらく観察することができました。

5～6羽の群れで枯れ草の実を食べていました。私が撮影している間にカメラマンや観察する人が増えていたのですが、少し近づいても我々のことは気にせず夢中で食べており、写真を沢山撮ることができました。大変うれしかったです。

市橋 栄二（札幌市中央区）





- ☆ 探鳥会（宿泊探鳥会を除く）は、どなたでも参加できます。参加費無料。事前申し込み不要です。直接現地に集合してください。昼食、双眼鏡等観察用具、筆記具などをご持参ください。
- ☆ 集合場所等については、愛護会ホームページ「探鳥地紹介」でお確かめください。
- ☆ 悪天候で中止の場合があります。探鳥地や当日の天候に応じて、防寒着、雨具、長靴などご用意ください。
- ☆ 探鳥会の開催を変更・中止する場合がありますので、愛護会のホームページでお確かめください。
- ☆ 交通機関の運行時刻等については、最寄りの営業所等にお問い合わせください。
- ☆ 探鳥会の問い合わせ先

北海道自然保護協会 ☎011-876-8546 10:00~16:00 (土・日曜、祝祭日を除く)

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月14日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 9:30
	中央バス：地下鉄東豊線環状通東駅発（北札幌線東69番・東79番）「モエレ沼公園東口」下車、徒歩10分。 開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しめます。	
4月21日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	JRバス：新札幌駅発（文京台線循環新83）「文京台南町」下車、徒歩10分。 夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
4月28日(日)	宮島沼	湖畔 10:00
	中央バス：岩見沢ターミナル発（月形線21番）「大富」下車、徒歩15分。 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
5月5日(日)	藤の沢	白鳥園（エルクの森パークゴルフクラブ向い） 9:00
	定鉄バス：札幌駅発又は地下鉄南北線真駒内駅発（定山溪温泉行又は豊滝行）「藤野3条2丁目」下車、徒歩15分。 藤の沢小鳥の村とその周辺を夏鳥の声を聞きながら巡ります。時にはホオジロやモズも見られます。	
5月6日(月)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	JRバス：新札幌駅発（文京台線循環新83）「文京台南町」下車、徒歩10分。 木々の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるクロツグミ、オオルリなど魅力いっぱいの夏鳥たちを探します。	
5月12日(日)	千歳川	さけます情報館手前の橋付近の広場 8:00
	公共交通機関はありません。 千歳川沿いに発電所ダムまで歩きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミが出現することもあります。	
5月19日(日)	鶴川河口	道の駅むかわ四季の館駐車場 9:30
	JR日高線：「鶴川駅」下車、徒歩10分。（道南バス札幌発浦河行ベガス号は休日の早朝便がなくなりました） 鶴川河口と人工干潟で近年減少しているシギ・チドリ類を探します。海岸へ向かう小径からは草原の鳥が見られます。	
5月26日(日)	野幌森林公園（早朝探鳥会）	大沢口 6:00
	早朝のため公共交通機関はありません。 早朝探鳥会です。夏鳥のさえずりを聞きながら早朝の森を歩きます。春の草花も真っ盛りです。	
6月2日(日)	茨戸川緑地	茨戸川緑地駐車場 9:00
	中央バス：地下鉄東豊線栄町駅発（栄町・教育大線栄20番）「あいの里4条7丁目」下車、徒歩20分 茨戸川と石狩川に囲まれた茨戸川緑地で草原の鳥を探します。時にはアリスイが姿を現すこともあります。	
6月9日(日)	厚別川	川下公園駐車場 9:00
	中央バス：地下鉄東西線白石駅発（川下線白24番）「川下公園」下車。 厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、カッコウの鳴き声や姿も期待できます。	
6月16日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	JRバス：新札幌駅発（文京台線循環新83）「文京台南町」下車、徒歩10分。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月23日(日)	福移	福移学園玄関前 9:00
	中央バス：地下鉄東豊線環状通東駅発（北札幌線東69番）「福移学園」下車、徒歩5分。 石狩川堤防沿いや石狩川と豊平川の合流点付近で草原の鳥を探します。チュウヒが見られる時もあります。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38 北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 ☎(011)876-8546

HPのアドレス <https://aigokai.org>